

Ⅲ 連携型中高一貫教育校の現状と課題

1 あわら地域（金津高校、金津中学校、芦原中学校）

本県では3つの地域で、市町立中学校の3年生の一部のクラスを連携クラスとして固定し、そのクラスの生徒を簡便な選考で高校に入学させ、高校での計画的・継続的な学習を保障するという中高一貫教育を実施している。あわら地域では、中学と高校のギャップをなくすため、高校教員による乗り入れ授業やサマースクールなど様々な交流を行っている。また、高校における連携クラスの生徒の大学進学への意識は高い。

（1）これまでの取組み

① 導入の背景、理念

確かな学力を身に付け、職業意識をもって進路選択し、将来地域社会に貢献できる生徒の育成を図るため、平成19年度から中学3年次に連携クラスを編成し、平成20年度に1期生が金津高校に入学している。

② 連携クラスの学級編成

中学校および高校ともに連携クラスの生徒だけで単独学級を編成している。中学校では各校1クラス、高校では2クラスを編成している。

【高校・中学校の連携クラスの生徒の推移】

(人)

学校名	H29年度	H30年度	H31年度	R2年度	R3年度
金津高校	41(1年)	45(1年)	39(1年)	33(1年)	45(1年)
	47(2年)	41(2年)	44(2年)	39(2年)	33(2年)
	42(3年)	47(3年)	42(3年)	44(3年)	39(3年)
芦原中学校(3年)	19	17	9	21	19
金津中学校(3年)	26	22	24	24	25

③ 中高連携教育の内容

連携クラスの生徒を対象に、中学3年の4月から週1時間、高校の英語教員が中学校に出向き、長文読解等に関する発展的授業を実施している。また、10月以降は週1時間、高校の数学や国語教員が中学校に行き、「数学Ⅰ」や古典文法など高校の授業内容の発展的授業を行っている。

また、長期休業を活用してサマーハイスクールやウインターハイスクールを実施し、中学3年生に対し国語や数学、英語の集中講義を行っている。

(2) あわら地域の課題等

[成果]

① 高校の授業への円滑な移行

中学3年から少人数による手厚い学習指導に取り組んでいるため、一般クラスの生徒より円滑に高校の授業に取り組んでいる。また、クラスのまとまりがよく、生徒同士の助け合いのほか、学校行事への参加も意欲的である。

[課題]

① 中学校3年における発展的な学習時間の確保

連携クラスの設置当初は中学校の選択教科の時間に、高校の教員が授業を行うことで、カリキュラムの特色化が図られ、それを魅力を感じる生徒が連携クラスに入ってきた。平成24年度の学習指導要領の改訂で選択教科がなくなって以降は、夏季休業等を活用し発展的な授業を行っている。

② 魅力ある中高一貫したカリキュラムづくり

連携クラスのカリキュラムに、これといった特長を見出しにくいと感じる中学生は、福井市内の進学校を選択肢の一つとして考えていることもあり、高校入試まで進路決定を遅らせる傾向がある。また、金津高校への進学を志望している中学生の中にも、中高連携のカリキュラムに魅力を感じず、高校では通常クラスに在籍したいと希望する生徒は、中学3年次での連携クラスへの入級を見合わせている。

③ 適性検査の在り方と連携クラス生徒の学力向上

中学2年次に、作文と面接により中学3年の連携クラスに入級するための適性検査を実施しているが、連携クラスに幅広い学力層が入級することにより、その後伸び悩む生徒がいる。このため、授業の難易度を設定することが難しく、学習への意欲向上も困難となっている。結果的に一般入試で高校に入学する生徒の方が、高校入学後も学力が高くなる地域がある。

2 越前地域（丹生高校、朝日中学校、宮崎中学校、越前中学校、織田中学校）

越前地域では、丹生高校と朝日中学校が連携をスタートし、平成27年度から宮崎・越前・織田中学校に拡大している。中学3年生からの発展的な学習や高校での特別セミナー、大学訪問等も行い、連携クラスの7割程度が大学に進学するなど生徒の進学への意識も高い。

(1) これまでの取組み

① 導入の背景、理念

確かな学力と豊かな人間性を育み、21世紀の日本やふるさと福井の未来を切り拓く人材を育成するため、平成19年度から中学3年次に連携クラスを編成し、平成20年度に1期生が丹生高校に入学している。

② 連携クラスの学級編成

中学校には連携クラスの生徒だけの単独学級は設置されていない。丹生高校は、連携クラスの生徒だけで単独学級を編成している。

【高校・中学校の連携クラスの生徒の推移】

(人)

学校名	H29年度	H30年度	H31年度	R2年度	R3年度
丹生高校	30(1年) 28(2年) 17(3年)	20(1年) 29(2年) 28(3年)	24(1年) 20(2年) 29(3年)	17(1年) 24(2年) 20(3年)	26(1年) 17(2年) 24(3年)
朝日中学校(3年)	15	17	13	16	8
宮崎中学校(3年)	0	1	0	2	0
越前中学校(3年)	2	3	1	2	2
織田中学校(3年)	3	4	3	6	6

③ 中高連携教育の内容

ア 中学校の取組み

朝日中学校は、数学と英語について1学期から週1回、連携クラスの生徒を取り出して、高校教員(T2)が指導に入っている。1月半ばまでに教科書を終え、3学期から週4回、高校教員(T1)が中学の授業内容の復習と発展学習(高校の科目である「数学I」「英語表現I」「コミュニケーション英語I」)を実施している。

※「チームティーチング」では、特定の教科で、主に授業を進める先生(T1)と生徒に個別に対応する先生(T2)が役割分担をして、生徒の個別課題に応じたきめ細かい学習指導を実施している。

その他の中学校では、連携クラスの生徒以外の生徒と一緒に授業を受け、高校の

免許を有する非常勤講師（町雇用）（T2）が指導に入っている。3学期からは、その非常勤講師が中学の授業内容の復習と発展学習を実施している。

また、夏季休業等を活用して、地域探究（「NYU探究Ⅰ・Ⅱ」）や英検対策講座等の集中講義を行うサマーハイスクールやウインターハイスクールの開催、学ぶ意欲を高めるための県内大学への訪問を実施している。

NYU探究Ⅰ：テーマごとに少人数のグループに分かれ研究を実施。高校生のほか中学生向けの発表会を開催

NYU探究Ⅱ：福井県出身の各分野で活用している人と関わる講義、体験講座

イ 高校の取組み

数学と英語に関しては、中学での発展学習を踏まえ、高校1年次の「数学Ⅰ」や「コミュニケーション英語Ⅰ」を、通常クラスより各々1単位（各々年間35時間）減じ、他のクラスが2年次から学ぶ「数学Ⅱ」「コミュニケーション英語Ⅱ」を高校1年次から前倒し設定するなど学ぶ時期を早めている。

（2）越前地域の課題等

【成果】

① 高校の授業への円滑な移行

少人数による手厚い指導や、1学期から高校教員等が中学校の授業を担当することにより、3学期からの発展学習に円滑に移行できている。

中高連携による探究的な学びやふるさと学習で、地域コミュニティ運営委員会や地域の歴史文化グループとの連携が強化された。

【課題】

① 学習意欲を向上させる学習指導方法の策定

高校の入学者選抜が中学生の学ぶ大きな目的となっているため、進路が早期に決まる連携クラスの生徒は学ぶモチベーションが下がってしまう傾向がある。また、数学を苦手としている生徒が連携クラスの半数を占めており、一律の指導による発展学習では、高校生活に対する意欲を減退させる可能性がある。

② 連携クラスの魅力あるカリキュラムの策定

地域と連携した探究活動が中心となっており、日本や福井の未来と切り拓くという教育方針と合っていないと感じている生徒・保護者がいる。教育活動に生徒の視野を広げる工夫が必要となっている。

3 美浜・若狭地域（美方高校、美浜中学校、三方中学校、上中中学校）

美浜・若狭地域では、美方高校と美浜・三方中学校が連携をスタートし、平成27年度から上中中学校に拡大している。様々な中高連携の行事も行いつつ、高校では連携生の約4割が国立・公立大学に進学するなど生徒の進学への意識も高い。

(1) これまでの取組み

① 導入の背景、理念

高度に科学技術が発展した21世紀の国際社会に通用する人材、地域に貢献する人材の育成を目指し、平成18年度から中学2年、3年に連携クラスを編成（平成24年から中学3年のみ）し、平成20年度に1期生が美方高校に入学している。

② 連携クラスの学級編成

中学校には連携クラスの生徒だけの単独学級は設置されていない。また、必ずしも美方高校に進学する必要もない。美方高校は連携クラスの生徒と高校入試により入学した一般クラスの生徒による混合学級を編成している。

【高校・中学校の連携クラスの生徒の推移】

(人)

学校名	H29年度	H30年度	H31年度	R2年度	R3年度
美方高校	28(1年) 24(2年) 19(3年)	25(1年) 28(2年) 24(3年)	25(1年) 25(2年) 27(3年)	18(1年) 25(2年) 23(3年)	26(1年) 18(2年) 25(3年)
美浜中学校(3年)	16	19	27	21	22
三方中学校(3年)	19	24	23	20	23
上中中学校(3年)	2	1	2	1	0

③ 中高連携教育の内容

美浜中学校と三方中学校については、1学期は高校と中学校の教員がティームティーチング(TT)で数学と英語の授業を実施している。2学期以降は課外授業として中学の復習・発展、英語の検定試験に向けた学習に取り組んでいる。

上中中学校については、夏季休業中に集中講座を開催し中学の復習・発展学習を行うとともに、2学期以降は課外授業として中学の復習・発展、英語の検定試験に向けた学習に取り組んでいる。

また、長期休業を活用して、3つの中学校の生徒を対象に大学教授による理科実験学習等を行うサマーハイスクールや、2月以降には課外で入学前特別講座を実施している。

(2) 美浜・若狭地域の課題等

[成果]

① 高校の授業への円滑な移行

小学校、中学校と共に学んできた生徒たちが、引き続き地元の高校でお互いが切磋琢磨している。また、高校の教員は入学してくる生徒の学習内容を把握した状態で高校の授業をスタートできている。

② 美方高校への入学の意識付け

連携生徒は必ずしも美方高校には入学する縛りがないが、中学と高校が交流を行うことにより、中学生が高校生活を具体的にイメージできており、美方高校への進学を意識する機会となっている。

[課題]

① 一貫した教育活動

中学校や美方高校ともに連携クラスの生徒のみの単独学級がないため、中学での発展学習が生かし切れない状況である。

② 学習意欲の低下と伸び悩み

簡便な選抜で高校に進学することができるため、一般入学者選抜を受ける生徒より普通科目を学ぶ目的意識が低く、緊張感なく過ごす生徒が多くいるため、進学に結び付く学力が伸び悩んでいる。

IV 福井県の中高一貫教育の充実に向けた提言

1 併設型中高一貫教育について

(1) 多様な教育課程の充実

① 早期の混合クラス編成と取出しによる多様な授業

高志高校・中学校は併設型中高一貫教育校であり、内進生と高入生が切磋琢磨しお互いを高め合う教育環境を整備することが望ましい。

全国の併設型中高一貫教育校における学級編成を調べると、6割が高校1年生段階から内進生と高入生が混在する学級編成を採用している。高志高校の内進生は中学校で高校課程の早期履修を行っているため、先行履修している科目は取り出して別教室で授業を行うなどの工夫を行い、生活クラスとしての混合クラスを高校1年次から編成することが望ましい。また、内進生に可能な限り早く追いつきたいという高入生の希望がある場合には、長期休業等を活用した集中講義等も検討すべきである。

② 中学での先行履修の在り方と高校での進学型単位制の教育課程の改善

高志中学校の授業時間は、市町立中学校より3年間で350時間多く、各科目において学習内容が充実している。また、中高一貫教育の特例を活用し、高志中学校の3年次では高校授業の「数学Ⅰ」「生物基礎」を先行履修している。

大学進学を見据えた高校入学後の履修を考えると、数学については、中学校での先行履修の効果はあると考えられる一方、理科については、特定の分野に限定して先行履修するのではなく、中学校の授業時数特例校の活用も検討しながら、様々な発展学習を通して生徒の興味・関心を高める方法を考えることが望ましい。

また、高校の卒業生アンケートを見ると、先行履修は8割の生徒が役に立ったと回答しているものの、スピードは今より遅い方がよいと回答している生徒が1割程度存在することから、中学での学習支援の状況や、高校進学時での学び直しなど生徒の希望も考慮した対応を講ずるべきである。

③ 全クラスを普通科系専門学科へ移行

高志高校は、平成15年度の文部科学省SSHの指定以来4期19年にわたるSSH事業、平成26～30年度のSGH、令和元年度からのWWLへの参加等を通して、探究型学習の充実に取り組んできた。

新しい高等学校学習指導要領は、探究型学習の充実を柱としており、今後は、これまでの成果をさらに発展させ、国内外の大学や専門機関と連携した課題研究、海外の高校生との共同課題研究等にも取り組むことが望ましい。

高校の普通科の教育課程の編成では、週30時間以上の授業時数の設定や特定の科目の減単が可能であり、学校独自の教科・科目は20単位まで配置できるなど柔軟なカリキュラム編成が可能であるが、さらに専門学科は、普通科に比べ理数や英語の単位（学

習内容)を柔軟に配置することが可能で、例えば物理基礎・物理の2科目を包括した科目を設定し、実験を含めた専門的な学びを充実させることができる。また、専門学科は3年間で専門科目を25単位履修するため、理数や英語教育を一層尖らせるカリキュラム編成が可能となる。

高志中学校での数学や理科の先行履修、文部科学省のSSHやSGH事業の実績等を踏まえ、理数教育や国際教育を専門に学ぶ普通科系専門学科への改変を検討することが望ましい。

(2) 探究型学習の深化

① SSH指定校として自然科学の課題探究も充実

正解のない時代を生き抜くためには、自ら課題を見つけ、多様な人々と協働しながら解決していく力が求められている。大学受験という外発的な学びだけでなく、知りたいという探究心など内発的な動機付けに基づく学びがますます重要になっている。本気で挑戦している人や本物の資料等に触れることで、生徒は多様な興味・関心を持つことから、課題探究は、専門学科(特に理数に関する学科)のカリキュラムに実験を多く取り入れるなどの特色を持たせ、自らの問題意識を掘り下げることで、個別最適化された探究へと発展させていく必要がある。

② SSHやSGH事業において、研究機関や国内外の高校と連携した課題研究の推進

校内にとどまることなく、大学や地域との連携、または他校との切磋琢磨、海外へと飛び出すような活動を積極的に導入すべきである。例えば、姉妹校や研究連携校を設けての交流や協働、または産学官が支援する地域探究のコンソーシアムへ参画し、探究の全国・国際規模のプロジェクトへの参加や探究学習のスキルアップのための教員の学び合いなども検討すべきである。

【高問協答申のポイント(高志・藤島・武生・若狭SSH4校)】

(2) 探究的活動の深化

① 研究機関や海外の高校等と連携した探究的活動の推進

JAXAや理化学研究所、東京大学等の研究機関の人材を、オンライン上でアドバイザーとして招聘し、専門的見地から助言を受けることも必要である。

また、海外の高校等と共同研究を実施し、研究成果を国外の大会でも英語で積極的に発信し外部評価を得ることが重要である。

(3) 主体的な学びを育む教育環境の整備

① 混合クラスや自然科学分野の課題研究を強化するための施設整備

高志高校を早期の混合クラス編成へ移行するためには、先行履修している数学等の取出し授業が必要となるため選択教室を確保する必要がある。また自然科学分野の探究活動に打ち込めるよう既存校舎の改修により実験室等を充実すべきである。

② 生徒が主体的に活動するための教育環境の整備

自尊心や忍耐力等の「自己に関わる心の力」や共感や協働など「社会性に関わる心の力」など、受験で求められる学力では測れない能力（非認知能力）が、将来に大きな影響を及ぼすと言われている。このため、外部人材や団体等を活用しながら、校則や暗黙のルールについて、教員や生徒と議論して、生徒たち自身がより良い学校生活のためにルールを変えていく当事者となるなど、生徒が主体的に行動できる学校づくりを進めていく必要がある。

③ 高志の中高生が語り合える場や生徒一人一人がリーダーを経験できる環境の充実

高志高校・中学校の教育目標である地域社会、国際社会のリーダーを養成するためには、中学校と高校の縦のつながりを重視することが望ましい。例えば高校生や卒業生をメンター（指導者）として中学生の学習習慣や自主学習の指導、学習面を含めた学校教育への質問対応等の支援を行うことは、メンターとなる高校生の育成にもつながるものであり、責任感や主体性、対話力を育むものとして導入を検討すべきである。メンタータイムの導入に当たっては、定期的な交流の機会を設けるなど、信頼関係を醸成することが必要である。

④ オンライン全国アカデミーへの参加

将来の進路を考え始める中学生の間に、可能な限り多様な大人や全国の同年代の生徒と交流し、議論することは重要であると考えられる。このため、オンライン等を活用した、“つながる環境”を用意し、様々な生き方をしている大人へのインタビューや、生徒間の意見交換、それらを自分の意見としてまとめ発信していく活動を検討することが望ましい。

(4) 入学選抜の見直し

ア 高志中学校入学者選抜

選抜は3種類の適性検査（Ⅰ：日本語の文章読解力や表現力等をみるもの、Ⅱ：数や図形等に関する力をみるもの、Ⅲ：資料やデータを解釈したり自然や社会の現象について考えたりする力をみるもの）に加え、平成31年度までは作文、令和2年度からは面接によって行われてきた。適性検査については、Ⅱ・Ⅲの難易度が高く選抜のための検

査としての有効性が疑問視される年もあった。

各適性検査においては、複数の知識を組み合わせて考えたり自分の考え・意見を論理的に表現したりする応用的な問いを設定し、小学校の学習内容の定着を確認するとともに、調査書やその他の提出書類等を活用して探究活動等の取組みを評価するなど、中・高の6年間で伸びる潜在能力を効果的に測定できる内容を、さらに研究する必要がある。

イ 高志高等学校入学者選抜

高等学校教育問題協議会の答申（R2.6）を踏まえ、海外留学や海外大学進学希望者、数学オリンピックの参加経験者など高志高校が求める人材像（アドミッションポリシー）を意識した入学者選抜制度を導入することが望ましい。

その際は、出願条件として、小中学校時代のどのような経験や実績を求めるのかなど、従来の特色選抜において受験生に課す国語、数学、英語の3教科の学力検査のほかに、学校独自の選抜方法等を実施することも考えられる。

【高間協答申のポイント（高志・藤島・武生・若狭SSH4校）】

（1）多彩な教育課程等の設置

①高校入試における特色選抜等の拡充等

高校入試において、秀でた才能や得意な教科、領域を持つ中学生を対象とした特色選抜を実施するとともに、科学オリンピック（数学、物理、化学、生物、地学）や情報オリンピックの対策講座を開催するなど国際大会を目指す生徒や指導教員のレベルアップを支援すべきである。近年、国の高大接続改革の流れの中で、東京大学など難関大学においても従前の推薦入試やAO入試を導入・拡充する動きがあり、こうした動きにも対応していくことが求められる。

2 連携型中高一貫教育について

(1) 中高連携クラスの育成方針の明確化

簡便な試験で高校に進学する連携クラス生徒の学ぶ意欲の維持・向上が課題となっている。このため、高校入学後の活動内容や、それに求められる学力を「見える化」し、また高校卒業後の先の世界を見せることにより、中学段階から学ぶ目的意識を常に持たせることが必要である。

この際、中高連携クラスの教育において、タブレット端末の徹底活用や教員の指導型から支援型への転換を通じた主体的な学び、中学段階での探究活動について、モデル的な教育を実践するなど魅力的なカリキュラムを実践すべきである。

(2) 学ぶ意欲の向上とふるさとへの誇りを育む中高一貫した探究活動の実施

① 「中高一貫教育推進アドバイザー」の設置

(1)の育成方針を踏まえ、中高一貫教育を推進していくためには、学校は意識を変え新たな発想を持って、生徒に選ばれる魅力ある教育活動を展開していく必要がある。このため、次の②～④の活動を支援・助言する外部のアドバイザーを設置することが望ましい。

② 生徒の心に火をつけるオリエンテーション集中合宿の開催

中学3年の連携クラスへの入級直後に、各校の連携クラスの生徒が一同に集まり、数日間の寝食を共にし、連携クラスのつながりを深めるとともに、自分は高校に進学し「何に挑戦したいのか」「高校で何を学ぼうとするのか」あるいは「社会のリーダーとしてどう貢献するのか」についてキャリアガイダンスを行うなど連携生としてのアイデンティティを学ぶ場として合宿を開催することが望ましい。事前に募集した生徒たちが、合宿の企画・運営に携わり、何かを作り上げる成功体験を経験させることも検討すべきである。

③ 生徒の主体的な学びの習慣化

高校進学後に大きな飛躍を遂げるためにも、中学段階から教員は指導(ティーチング)から支援(コーチング)へと転換を図り、学習アプリなど様々なツールを活用した個別の学びを進め、より主体的な学びを早期に身に付けさせるべきである。

④ 中高一貫した探究プログラムの策定

探究活動については、国の学習指導要領においても、中学校や高校の年次ごとの指導内容が明確ではなく、中学校や高校において学ぶ内容が統一されていない。このため、テーマ設定や仮説の立て方、データ分析・検証の方法等の探究基礎の習得や、県内外の

大学、企業と協働した活動、課題探究の成果発表まで中高一貫したプログラムを策定することが望ましい。

⑤ 挑戦する生徒の育成

目ごろの語学習得や探究活動の成果を生徒が感じ、また外部からフィードバックを得るため、学校内にとどまることなく、中学生や高校生に目ごろの学びの延長で様々な挑戦を行わせるべきである。中学生の高校での探究学習発表への参加や、英語による探究講義など高大連携事業の見学、訪日している海外の生徒等との英語での討論など様々な機会を検討すべきである。

【参考 高校生ワールドハピネスフォーラム】

地方創生に向けた各高校の取組みを伝え合い議論や交流を行う武生東高校が主催する国内生徒と海外生徒30名が集うフォーラム

⑥ 視野を拓ける海外を含めた選択型研修旅行等の検討

中高一貫した探究活動の一環として、例えば課題テーマに沿った海外の現状見学や現地の人々との交流、これまでの生徒自身の探究活動の発表などを通して、世界の人々と互いに学び合い、見聞を広める教育活動も検討すべきである。

⑦ 高校の先にある大学進学や、さらにその先の就職をイメージ

中学での発展学習や高校での前倒し学習、特色ある英語教育活動については、生徒一人一人の学ぶ目的が明確でなければ、主体的な学びを継続することが難しい。例えば最先端企業の訪問や、県内企業や研究機関との交流を増やし、先輩たちが活躍している姿を見せることにより、将来の進路を具体的にイメージさせることが望ましい。

(3) 併設型に近い福井県独自の中高一貫教育の実施

① 中学3年次の連携クラスに高校の担任(副担任)予定の教員を選任

高校教育への円滑な移行を行うためには、高校教員が中学段階から生徒と信頼関係を築き、性格や学力定着度を把握することが望ましい。このため、可能な限り高校1年次の予定担任・副担任を選任し、中学校での指導に当らせることも検討すべきである。

② 中学での発展的授業の強化

中学校で連携クラスを編成し、簡便な適性検査で高校の連携クラスにスライドさせる本県独自の制度を活用し、高校の授業内容を含む発展的授業の強化を図るべきである。中学3年次の夏季休業等や補充学習の充実、7限目の設置もしくは、中学校の授業時数特例校の活用、高校への登校日を設けての講義やオンラインを活用した講義を検討すべきである。

この場合、高校教員や県教育委員会の大学進学サポートセンター教員を中学校に派遣しての学習や確認テストの実施などが望ましい。これらの活動が学校現場において着実に実施できるよう派遣体制の充実を考える必要がある。

③ 金津・丹生高校に加え美方高校に連携生だけのクラス設置

中学校での発展学習や主体的な学び、探究活動を踏まえ、高校において継続した教育活動を実施するためには、従来から連携クラスを設置している金津高校や丹生高校に加え、美方高校についても連携生だけのクラスを編成することが望ましい。

④ 高校での連携クラス独自のカリキュラムの策定

中高連携クラスの育成方針や中学校での主体的な学びの習慣化、発展学習の学力定着度を踏まえ、高校においては、1年次の科目の単位を減じて、より発展的な学習を実施したり、高校2年次の学びを前倒しするなど大学受験等にも備えた独自のカリキュラム編成を行うことも検討すべきである。

⑤ 特色ある英語教育の実施

高校入試の影響を受けない教育が可能なことから、受験日程に縛られることなく、中学段階から英語の「話す」を含めた4技能（読む、書く、聞く、話す）を伸ばす教育を検討すべきである。例えば、中学校と高校において「オールイングリッシュ」を含めた様々な取組みや、補充学習等にラジオ英語講座等を取り入れるなど、リスニング・音読を強化する教育の実施を検討するとともに、レベルの高い英語の検定試験に挑戦できる機会を設けるべきである。また、物おじせず自分の意見を論理的に表現する力を併せて養うことも考えるべきである。

(4) 高校生の学ぶ意欲の向上と中高一貫教育の中学生へのPR

中学1年次から高校生と交流することは、中学3年次には「連携クラスに入級し、将来は先輩のように頑張りたい」というインセンティブになると考えられる。また高校生にとっても責任感や学ぶ意欲の醸成に繋がる。

福井大学教育学部では嶺南地域枠を設け人材を育成していることから、例えば美方高校の高校生が教員とともに中学校へ出向き、教員支援のもと授業の指導や、中学生の探究活動の支援等を行い教師の魅力を伝えていくことも考えられる。

また、夏季休業等を活用し高校でオープンラボ（理科実験）等のイベントを企画するなど、高校での学びをイメージさせる取組みも検討すべきである。

中高一貫教育の制度と本県の状況

1 中高一貫教育の制度

(1) 目的

- ・従来の中学校・高校の制度に加えて、生徒が6年間の一貫した教育課程や学習環境の下で学ぶ機会を選択できるようにする。
- ・中等教育の一層の多様化を推進し、生徒一人一人の個性をより重視した教育の実現を目指す。

(2) 種類

ア 中等教育学校

- ・一つの学校として一体的に中高一貫教育を行う。
- ・県内には当該学校は設置していない。

イ 併設型の高等学校・中学校(高志高校)

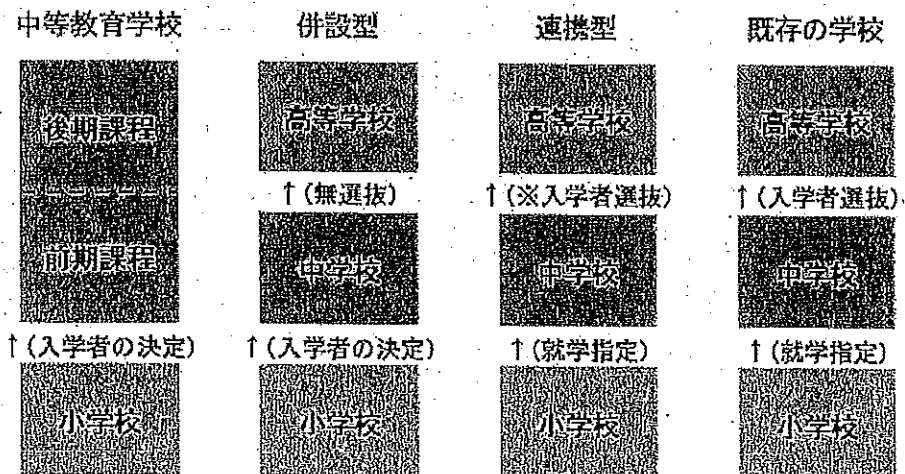
設置者が同じ

- ・高校の入学選抜を行わずに、同一の設置者による中学校と高校を接続する。
- ・高校の指導内容の一部を中学校へ移行することが可能。この場合、高校で再履修しないことが可能

ウ 連携型の高等学校・中学校(金津高校、丹生高校、美方高校)

設置者が異なる

- ・中学校と高校が、教育課程の編成や教員・生徒間交流等の連携を行う。



※調査書及び学力検査の成績以外の資料により行うことが可能

(文部科学省 HP 抜粋)

2 中高一貫教育校の特例

		中等教育学校 併設型	連携型
中学校段階	選択教科による必修教科の代替え	必修教科の授業時数を年間70単位時間内で減じ、当該必修教科の内容を代替することができる内容の選択教科の授業時数に充てることができる	/
高校段階	指導内容の移行	①中学校と高校の指導内容の入れ替え ②中学校から高校へ指導内容の移行 ③高校から ^{先取り学習} 中学校への指導内容の移行 ※この場合、高校で再履修しないことが可能 ④中学校段階内の学年間において指導内容の一部を移行	
	普通科における「学校設定科目」「学校設定教科」	36単位まで	

連携型：6年間の計画的かつ継続的な教育を施し、生徒の個性の伸長、体験学習の充実を図るための特色ある教育課程の編成

3 福井県の中高一貫教育

(1) 併設型中高一貫教育校の概要

高校入学者選拔を行わずに6年間の中高一貫教育を実施する。

(令和3年度 () 高志中学校からの内進生の在籍数)

学校名	1年	2年	3年	連携の内容
高志高校	248(87)	247(87)	239(81)	高校3年生は混合クラス
高志中学校	90	90	90	

(2) 連携型中高一貫教育校の概要

中学3年生への進級段階で連携クラスの生徒を選考(福井型)し、簡便な選抜により高校に進学させる。

(令和3年度 () 連携クラスの生徒数)

学校名	1年	2年	3年	連携の内容
金津高校	218(46)	209(33)	217(39)	連携生徒のみの2クラス
芦原中学校	60	85	78(19)	3年から連携生徒の単独学級を編成
金津中学校	135	124	124(25)	
月生高校	107(26)	105(17)	121(24)	連携生徒のみの1クラス
朝日中学校	102	83	101(8)	3年から連携生徒が集まって 数学と英語の講座を編成
宮崎中学校	36	24	33(0)	
越前中学校	31	26	30(2)	
織田中学校	35	36	38(6)	
三方高校	72(26)	94(18)	92(26)	連携クラスなし
美浜中学校	68	61	69(22)	美浜・三方中学校は3年から連携生徒 が集まって数学と英語の講座を編成
三方中学校	58	67	62(23)	
上中中学校	80	63	69(0)	

「高志学」6年間の概要（計画）

【高志学がめざすもの】

- ・「ふるさと福井」に誇りを持ち、グローバルな視点を持ったイノベーターの育成
- ・「ふるさと学習」の新たな展開を実践し、県内外における高度化を牽引

